

東京の空

遠藤 芳子

来る日も来る日も

黄色い壁と

埃の積み重なったカーテンに囲まれたまま

空が見たい、亡き子に会いたい

心が叫ぶ

両眼が伸び

屋根を突き破った

傷ついた眼に映った白っぽい空

なんと狭いことだろう

これが空なのか

憧れていた空なのか

歪んだ円、もしくは歪んだ菱形

歪んだ六角形か、いや形容すら出来ない空の形

連なる家々の屋根

ビルの壁やら電線やら蜘蛛の糸やらが

空を切り取り

往来する人々や母親の心を現している

人の影、ビルの影、犬も猫も

いじましく枯れ始めた桜の木の影さえ

重なり合い、喘ぐように空を見ている
喪った子は何処にもいない
空虚さだけが漂う空

果てしなく遠い蒼さの中で
東京を見ている見えない眼
膨大な宇宙ゴミに傷をつけられ、時折
滂沱の涙を流す眼がある